

世界的ベストセラー

アベノミクスは経済格差を解消できるのか？

トマ・ピケティ『21世紀の資本』で読み解く日本経済

仏・経済学者トマ・ピケティが発表し、英語版が出るや否や全米で50万部のベストセラー。日本でも翻訳版が日本語版700ページを超える学術書が、なぜこんなに注目されるのか。日本語訳者の山形浩生氏に解説してもらった。

文・山形浩生



これはアタリですーこれはアタリです二十これはアタリです三十これ

世界的ベストセラーの言いたいこと

ピケティ『21世紀の資本』（みすず書房）は決してむずかしい本ではない。分厚いだけだ。主張は明解だし、欧米の分厚い基礎文献の常として、基本的なところもていねいに説明する。それをまどろっこしく感じる人もいるかもしれない。訳しながらちよっとゲンナリしたのは事実だ。それでも、読者のみなさんは、訳者とはちがって知っている部分はとせばいい。

でもピケティを取り上げ、かなり解説が行われている。そして本書はこけおどしの難解さで無内容な意味不明さをごまかすような哲学書ではない。

か？ こういう状態が続くと、資本のほうが経済全体よりも急速に拡大しかねない。経済成長と同じくらいしか増えない労働所得に対し、資本からの不労所得がどんどん大きくなり、格差が高まる。しかもその資本が世襲されれば、その格差は拡大する一方となる。これを避けるためには、資本からの収益を税金で下げることが必要となる。両者の差は年率3%ほどだから、資本に2、3%の税金をかければ格差増大の力が相殺される！



な気になる。「そんなの知ってたよ、大したことないね」とうそぶく人もツイッターなどでたくさん見かけられる。でもそれでは、この本がなぜ騒がれているのか、つま

りは本書の価値は理解できない。この本のえらさはまず、過去数百年の課税台帳をほじくりかえすところからはじめて、いまの話を実証的に示したことだ。現代の経済

『21世紀の資本』の本当の価値と意義とは

学は、20世紀前半に確立した。その理論の相当部分は当時のデータをもとにしている。そしてその後、だれもそれを検証しなかった。ピケティは、それを改めて見直した。そして、実際のデータがこうした理論の前提とは一致していないことを説得力ある形で示した。

こうした経済学の基盤の見直しこそ、本書の大きな意義だ。一方、同じ経済学でもフアイナンス理論の世界では、rvgはむしろ常識に属する話で、この分野の人々はいまの騒ぎに首を傾げている。ある意味でこれは経済学の中でこれまで隠れていた分

断を明らかにした面もあるのだが……、そちらの話はここではとぼそう。

言うなれば、本書の力は実証の力だ。理論がどうあれ、データはこうなっていますと言えるところに本書のパワーがある。だからこそ、本書は従来の「格差は拡大している／いやしていない」「格差は不当だ／いや実力とITによる当然の結果だ」という最近の格差議論に多かつた水掛け論や印象論を押さえて、今後の議論の基礎となるだけの力を持ち得ている。

そして、それがある意味では本書の弱さではある。この本は「なぜ」という疑問に必ずしも答えてはくれない。

なぜ21世紀の経済成長率は1・5%になるのか？理論的にはわからない。トレンドを見るとうそなっているからだ。

なぜrvgでrが4、5%を保つのか？ いろいろ仮説は出ているけれど、結局は「いろいろあるだろう」という話になる。多くの紹介記事などで、この本が格差拡大のメカニズムを明らかに



これはアタリですーこれはアタリです二十これはアタリです

した、などと書いてあるのは明らかに勇み足だ。むしろ、今後のそうしたメカニズム解明のために、基盤を作ったのが手柄ではないか。

さらに、格差が開いてなぜ悪いのかという点についても、その弊害を実証するところまではきていない。格差拡大は現在の社会を成り立たせている価値観に反するし、民主主義の基盤も弱める、という指摘はあるし、

それは事実だろう。

そして格差が開けば社会不安が起き、革命や動乱が起きることもある。でもいまの日本欧の社会がその水準まできているのか？ これはわからない。だから、ピケティは文学作品などの引用を通じて、少し情緒的な議論を展開するけれど、それを説得力あるものと思うかどうかは読者次第。が、格差が開きすぎるのは

格差を生み出す根本的要因

$r > g$

資本収益率
the rate of return on capital

経済成長率
the growth rate

「資本収益率が産出と所得の成長率を上回るとき、資本主義は自動的に、恣意的で持続不可能な格差を生み出す」『21世紀の資本』より

